

NPO 法人

芦安ファンクラブ通信

第 39 号 秋

特定非営利活動法人芦安ファンクラブ

事務局 南アルプス市芦安芦倉1589-8 大滝要造

電話 055-288-2531 fax 055-288-2533

URL=<http://catv.nus.ne.jp/~afc3193/>

E-mail=rantan@blue.ocn.ne.jp

一〇一〇年

帰ってきました芦安に

中央道から中部横断道路に入ると間もなく見えてくる南アルプの山々を右手に見ながら白根インターを降りた。

白根インターの前には淋しく季節を終えた『さくらんぼ狩り』の文字・今年もさくらんぼを食べられない季節に来てしまった、山口と森川。

くるくるくるくるループ橋を確信。『甲斐犬の里へようこそ』の文字に怖い顔の犬を思い、橋を渡つて、去年と違う道におびえながらフルーツの道へ入ってきた。次第に広河原へ案内する看板が多くなり、芦安が近いことを思い出しながら、芦安温泉のゲートをくぐり、今年も芦安へやってきた。

今夜は芦安ファンクラブの大滝さんが営む『らんたん』さんにお世話に。

去年も入ったトトロ風呂。

夜もくれた頃、あの人があつてきた。

私達のリーダー・芦安ファンクラブのドン！清水さんだ。

清水さんと再会をはたした後、お揃いの手作りネームタグを手渡し、明日ザ

ツクに装着しなければならないと説明。その後、リーダーから明日の予定が発表された。

兄さんのアイデアだ：ありつちやうありやなあ。

駒仙小屋から仙水小屋まではすぐ着いた。

入山届を記入し、いざ出発。

七月二十四日、十八個の小さなトンネルをぬけて、再び広河原へやつてきた。

広河原の入り口には去年はなかったはずの立派なインフォメーションセンターや河原の整地がされた

いた。コロ助ヘッドのお兄さん

が働く広河原インフォメーションセンターには北岳や南アルプス市に関する情報が満載で、力強く蕎麦を打つ女性の写真は、リーダーのお母さんだつた。リーダーから私達が今後も登りそうにないバットレスの講習を受け：勉強になつたつ…。

広河原山荘でお昼をよばれる。森川が食した牛丼にキャベツの千切りが敷かれており

山荘のお兄さんのアイデアらしく：これがなかなかいける！！山口は肉うどんを食し



部屋は、リーダーと若いメンズ五人衆と相部屋で…何か起こりそうな予感。毎度のこと、早い山の夜は更けていつたのであった。

その夜、事件は仙水小屋一階角部屋で起こった。

地鳴り…？いびき
地雷…？寝つ屁
犯人は判っている。
私達は悲惨な現場を後にし、星屑のステージへ。

綺麗な星空に山に来たんやなうって実感が湧き…感動した。

七月二十五日、朝ご飯。お茶をもらうには…昨夜同様。

樹林帯を抜け、溶岩石がごろつく岩場を抜けると、仙水峠にご来光が射し込んできた。日の出だ！

私達を歓迎してくれた。感動した。

ご来光を浴びるどの様な方でも、この光の中では男前に見える。

ここでの愛の告白は、成功率が高い。

山口「清水さんこれ花崗岩？」 その石は違う。その石も違う。

摩利支天は、朝日で白く輝いていた。

リーダー「あれは…頂上じやないよ。隣では山のおやじがヤカンを持ちスランバっていた。



部屋は、リーダーと若いメンズ五人衆と相部屋で…何か起こりそうな予感。毎度のこと、早い山の夜は更けていつたのであった。

その夜、事件は仙水小屋一階角部屋で起こった。

地鳴り…？いびき
地雷…？寝つ屁
犯人は判っている。
私達は悲惨な現場を後にし、星屑のステージへ。

綺麗な星空に山に来たんやなうって実感が湧き…感動した。

七月二十五日、朝ご飯。お茶をもらうには…昨夜同様。

樹林帯を抜け、溶岩石がごろつく岩場を抜けると、仙水峠にご来光が射し込んできた。日の出だ！

私達を歓迎してくれた。感動した。

ご来光を浴びるどの様な方でも、この光の中では男前に見える。

ここでの愛の告白は、成功率が高い。

山口「清水さんこれ花崗岩？」 その石は違う。その石も違う。

摩利支天は、朝日で白く輝いていた。

リーダー「あれは…頂上じやないよ。隣では山のおやじがヤカンを持ちスランバっていた。

上は先だよ。」
登る…登る…と共に森川の記憶は薄れていく。

と共に山口は恒例のシャリ切れだ。

ようやく駒津峰に到着

駒津峰では駒ヶ根の町と富士山・八ヶ岳・南アルプスが姿を現し、三百六十度の眺望が見渡せた。

森川「こうゆう景色が見たかったんやう」と実感した。

山口「お腹すいたなう」と実感した。

が、昼ご飯はまだ。

駒津峰から一度下り甲斐駒ヶ岳山頂を目指す。

駒津峰から六方石で森川はエンスト。

時間に余裕がなくなつたので、六方石から頂上まではリーダーと山口がトライすることになつた。

白い岩場に消えていくリーダーと山口。

砂のような足場に超う内股の山口は滑つて滑つて。

その三十五年の内股にリーダーは放つ「ガニ股にしろ！」と。

山頂では八ヶ岳・中央アルプス・北

駒ヶ岳神社に無事登れたことを挨拶し、リーダーと固い握手を交わし、ありがとうとリーダーに感謝した。



岳・仙丈ヶ岳がお目見え。

シャリ切れの山口は新幹線のような速さで弁当を完食。

さう食後のチョコレートとコーヒー頂こうつと♪

リーダーは大事なオヤツを置いてきていた……。

下山。

雷鳥さんを発見！！

砂遊びをしている雷鳥さんだ！！

甲斐駒ヶ岳で雷鳥さんを見る事がで

きるのは珍しいらしく……

やはり、あの人はシャツジャーを切りまくっていた。

そして、やはり人は虫にさされ、リーダー持参のキンカンを塗つていた。

本日の山小屋は駒仙小屋。

リーダーは一升瓶のワインをふるまつっていた。

森川はくたばつて寝込んでいた。山口はバジルソース風味の鳥肉をべたぼめしていた。

次第に積もる酒の勢いか、シャイな山小屋の奥さんにシェフは？と何度も絡んで困らせていた。

私達の寝る部屋は2階のヤマネさんが住んでいる部屋だ。

ヤマネさんといつても屋根裏などを走るヤマネさんだ。

一目みないので夜中も物音がする度にヘッドライトを照らしまくる。

いた！！！

と、思つたら、天井に張り付けてあるヤマネさんの写真だった。

森川は喘息が止まらず、このまま朝に

息をしていないかもしねれない……と初めて思つていた。山口は「二人で登ら

ないと意味がないから」、と明日の仙丈ヶ岳予定から「小仙丈ヶ岳に行ける

所まで一緒に行こう」と言つてくれた。

今のうちに「ありがとう」と言つておこうと思い告げたのはヤマネさんが走る夜中のことであつた。

七月二十六日、森川生きていた。

富士山・北岳・甲斐駒ヶ岳が見えたり見えなかつたり。

2合目では山梨県と長野県の分岐点で腰をかけて休憩。

鳥の声に耳を傾けて、吹く風と共に苦しさも流されていく、気持ちがいい。

樹林帯が続くが、五合目の大滝の頭まで登れば視界はグッと広くなる。

ハイマツが多いので雷鳥さんがいるのではうとチラ見するが：

なかなかないものだ。なんせ、今日は晴天。

そのかわり景色は最高だ！！！

ハイマツをぬけると小仙丈ヶ岳に到着。

バックに仙丈ヶ岳のカールを見ながらの最高のランチタイム。

森川は山口が今年も弁当をひつくり

ぱっくに今年の夏が終わろうとしている。

もうかれこれ三日も風呂に入つてい

ない私達、頭皮も限界に。

雪解け水が豊富な南アルプスの川には天然の美容室がある。

互いに髪を洗いあう私達。

その昔、芦安に髪を洗つていた美女がいたという沢の伝説。

リーダーはその伝説を思い出した。

私達も前世のことを思い出した。

私達、カミアライ沢に住んでいたことを。

また、私達、この素晴らしい芦安に自然と帰つてきいていたんですね。

返してくれるやんな？つと期待もしだが、弁当はすでに完食。

仙丈ヶ岳方面へ散歩にでかけるとチングルマがさいていたが、今年は春の花が終わったところで、夏の花はまだあ

まり咲いていなかつた。

お花を見るのが一人の一番の楽しみだつたが、今年は残雪が多かつたのでどうもいかなかつたようだ。

それしてもうお花の名前、覚えるのつて：難しいですねえ。

長野県をバックに標識の前で記念撮影、



文 森川 靖子
山口和佳子

第二十五回

南アルプス芦安登山教室

平成二十二年九月二十五日(土)から二十六日(日)に行われた。今回のテーマは「深まりゆく紅葉の北岳クラッソクルート・池山吊尾根を歩く」となっていた。実は、一昨年の九月二十一日に、芦安ファンクラブで、吊尾根に案内標識を設置した時に、好天に恵まれ、北岳バットレスの展望、一面のウラシマツツジ、ナナカマド、ダケカンバ等の紅葉が眩いほどで、之を是非大勢の人見てもらいたいという思いからだ。

南アルプススーパー林道及び県道南アルプス公園線が開通してから、広河原まで車が入れるようになつた、そのため長大な池山吊尾根コースは、歩く人は無くなつてしまつた。しかし、積雪期には、雪崩の心配がないため、北岳、白根三山縦走の入山者のメインルートになっている。

広河原山荘前に、一般参加者十五名、芦安ファンクラブ会員八名が集まつた。心配された天候は回復し、この秋一番の秋晴れとなり、風もなく絶好の

登山日和となつた。山荘前で開校式を行い、依田さんの指導で、柔軟体操、ストレッチングを行い、一班にグループ分けして出発した。

昨日までの雨で、大樺沢は増水していることもあり、尾根道にルートを探り白根御池小屋を目指した、樹林帯の中で、本格的な紅葉にはまだ早いが、紅葉したカエデなど散見され彩りを添える。樹林帶は雨上がりということもあり、実に爽やかで、時々、樹間から青い空や吊尾根側の斜面の展望が新鮮に目に映える。

参加者の体調は、梯子などがある急登もすこぶる良好で、標準コースタイムよりも早く急坂を登り切つた、以前、遭難した大久保さんの搜索で、休憩地点から小太郎尾根に直登した話などが出て、そこからはトラバース気味に、白根御池小屋に着いた。

今回の座学は、大部屋において「上手な山岳写真撮影のコツ」というテーマで、白根御池小屋の支配人で、山岳写真の会「白い峰(会長・白旗史郎氏)」

会員の山岳写真家高妻潤一郎氏に講演をしていただいた。ユーモアを交え判り易い話に全員興味を持って、一時間半の講義を受けた。高妻さんは話の

中で、山の写真は、山頂を中心置かないこと、ポイントは「い」の字に配置することなどを教えていただいた、専門家は、一箇所で動かずに、一~三日間もカメラを構えていることがあると聞いて驚いた。

北岳山頂が見えた。コースが長いので、股に長さ百m、幅二十mほどの雪渓が残っている、今年は、異常気象で猛暑の夏だったのに、雪渓が融けないで残っていることに驚く。

二俣からは、沢筋の登山道には高い木がないので、見晴らしが聞き北岳バットレスや鳳凰三山が展望できる。草花は遅くナデシコやグンナイフウロウ、リンンドウの名残が若干咲いていて、ナナカマドの真っ赤な実が目立つていた。

上部二俣で休憩し八本歯尾根に取り付く、梯子のある急登になり、大分疲れて遅れる人が出てきた、甲斐駒の奥に八ヶ岳や奥秩父の山々が姿を現してくる、バットレスには十五人ほどのパーティが取りついていた。

座学と夕食が済んでから、大部屋で、高妻さんから、缶ビールと酎ハイの差し入れを戴き懇親会が開催された。自己紹介では、今回の参加者が全てリピーターであり、芦安ファンクラブの登山教室を楽しみにしているという人



たちばかりで、話が弾み盛り上がつた。

二日目も天気が良く、小屋の前から北岳山頂が見えた。コースが長いので、朝食を済ませ、準備運動をして六時前に出発した。大樺沢二俣に着くと、左

股に長さ百m、幅二十mほどの雪渓が残っている、今年は、異常気象で猛暑の夏だったのに、雪渓が融けないで残っていることに驚く。

北岳山頂が見えた。コースが長いので、股に長さ百m、幅二十mほどの雪渓が残っている、今年は、異常気象で猛暑の夏だったのに、雪渓が融けないで残っていることに驚く。

北岳山頂が見えた。コースが長いので、股に長さ百m、幅二十mほどの雪渓が残っている、今年は、異常気象で猛暑の夏だったのに、雪渓が融けないで残っていることに驚く。

北岳山頂が見えた。コースが長いので、股に長さ百m、幅二十mほどの雪渓が残っている、今年は、異常気象で猛暑の夏だったのに、雪渓が融けないで残っていることに驚く。

北岳山頂が見えた。コースが長いので、股に長さ百m、幅二十mほどの雪渓が残っている、今年は、異常気象で猛暑の夏だったのに、雪渓が融けないで残っていることに驚く。

奥山かがみさん) の二人は、ここから下山することになった。

八本歯のコルからは、南方向に切り立った岩稜を登る、ファイスクスロープもあり、緊張しながらも超え遭難碑のあるケルンに着いて休憩、この遭難者はスタッフの井口さんが所属していた山岳会の先輩、石川さんが勤めていた。



レスのルート説明を井口さんが行つた。ここからの稜線のルートは、ハイマツ、丈の低いダケカンバ、ナナカマド及び真っ赤に紅葉したウラシマツツジが足元に、富士山、南アルプス山並み八ヶ岳、奥秩父等のパノラマが展開し、高妻さんに教わったテクニックを思い出して、カメラのシャッターを切つた。

しばらくすると雲が湧いてきてボーコンの頭で昼食を採つてからは、展望が狭められた。

一昨年、芦安ファンクラブで設置した標識から、南にコースが折れ長い下り坂となる。二十分ほど下ると、未だ紅葉には早いが、一面のダケカンバ帯になり、登山道はツガなどの原生林帶になり、展望はなくなってしまった。

原生林のなかをひたすら下り、苦むした樹林帯となつてしまふと、池山御池小屋に到着、ファンクラブの清水准一さんたちが登つてきていた、こから下の登山道整備をしてきてくれたとの由、池は、フウチソウなどが生え、水は溜まつていなかつた。

若干休憩してから出発した、池からこから、東方向に下り、広い場所で、北岳をバックに記念撮影、北岳バット



迎えの芦安観光のジャンボタクシ

(一日目) 広河原十二時三十分→十

二時五十五分分岐十三時→十三時三
十二分第一ベンチ十三時四十分→十

四時十分第二ベンチ十四時二十分→十
急坂上→十五時十五分白根御池小屋

(二日目) 小屋五時五十五分→六時二
十分二俣六時三十分→八時十分最終
水場池八時二十分→九時八本歯コル
九時十五分→十時五十三分ボーゴン
の頭十一時十五分→十三時十七分池
山小屋十三時三十五分→十五時三十
分県道あるき沢橋

が、しばらくして急な下山道となる、ジグザグな道であるが、所々崩れて滑り易いところがある。長くて急な下りに、滑つて尻餅をついたり、膝を痛める人もある、長くつらい下りとなつた。しかし、何とか頑張つて、予定の午後三時半にあるき沢橋に下山することが出来た。

一に乗り、アルペンプラザでイワカガミのお二人と合流して、芦安山岳館まで戻つた。二日目は、深い紅葉が迎えてくれる目論見であつたが、今年の紅葉はいつもより遅れていたのが若干心残りである、行動時間が九時間を超える健脚コースだったが、天候に恵まれほぼ計画通りの縦走が出来た。

コースタイム

記 望月泰孝
画 望月泰孝 杉山啓子

古跡に見る

かひがね



NPO法人芦安ファンクラブ 渡辺典美

十月七日の毎日新聞に紹介された
渡辺さんの力作「かひがね」を連載し
ます。御期待ください。

「古典に見る甲斐が嶺・

甲斐の白峰」

一 はじめに
南アルプスと呼ばれる赤石山脈は、日本列島本州の中央部、諏訪湖南端から中央構造線と糸魚川構造線に挟まれる形で南に向かつて楔状に隆起して広がっている、日本唯一の三千メートル級の山々を連ねる山脈で、東に釜無川から富士川となる「麗流」を、西は天竜川の「雄流」を古来から息づかせ、神秘的で美麗、かつ人々の生活を物心ともに支え続けています。そして今もなお東西の距離を縮めることさえ拒み続けているのです。

南アルプスの成り立ちについては、地震の原因分析として知られる「プレートテクトニクス理論」では、およそ二億年前に海洋プレートが大陸プレートに沈み込む時に海底の岩石や地層が陸側に押し上げられ、一千五百万年もの時をかけ付加体と呼ばれる地質体を造り上げたうえ、三千メートル以上も天を突いた大地が更に永い時を経て浸食・開析され、高い頂と深い渓谷を形成、徐々に現在の山の形が整えられたとあります。

さらにおよそ二万年前の最後（第四）の氷河期でも山頂まで氷河に侵されなかつたため、氷河後退に伴つて世界の山々が荒々しく変貌したにも関わらず、山容の穏やかさと稜線の美を残し、冬になると他に類を見ない真純白の雪化粧を見せております。加えて迫り来る氷河からの難を逃れ、気の遠くなるほどの長い年月、山頂にかけて種を繋ぎ続けた、世界中で、ここでしか見られないキタダケ草の不思議な生命力が、神秘的な「氣」となつて峰々に満ち溢れています。

そんな白根三山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）に前衛峰である鳳凰三山や甲斐駒ヶ岳など自然の創造の配置が、南アルプス山塊として人智・人力ではおよそ創ることのできない美麗、莊厳、雄大、

神秘等を創り出し、古来から今日に至るまで、ただ無言、その姿を見せるだけで、人々の心和ませ、勇気を与え、感性を揺さぶるなど人間に訴え続け、芸術・文学等の世界でも多くの作品を残させております。

平成二十二年三月二十七日、信州の飯田で開催された「南アルプス世界遺産フォーラム」に参加し、「南アルプスを世界遺産に」との皆様の湧き上がった熱気に影響され、その実現のため、数多くの和歌の舞台となり、古典文学に少なからぬ影響を与えた白根三山の美を和歌の世界から検証してみました。

二 「白根と白峰」

と調べてみると、山岳文献では「白根」と

は一つの山が雪をかぶった状態で、白峰は雪をかぶった峰そのものとあり、そうだとすれば「白峰」と表記するのが正しいのではないかと思われます。

「白根」か「白峰」、本来はどちらなのかと調べてみると、山岳文献では「白根」とは一つの山が雪をかぶった状態で、白峰は雪をかぶった峰そのものとあり、そうだとすれば「白峰」と表記するのが正しいのではないかと思われます。

近代登山の父と呼ばれるイギリスの宣教師W・ウェストンは、「日光白根、草津白根（火山の山）と混同してはならない。この名は【白峰】が縮んだものである」と。

また小島烏水は、平家物語を引用、「この山こそが白峰の二字に在る【北に遠ざかりて（何等の神秘）雪白き山あり（何等の高潔）・平家物語】即ち白峰である。何という透き通った感じのする山名であろう。この外に美しい名もなければ、威厳ある名もない。」と絶賛しています。

高頭式もこれに共鳴しており見解も一致しています。

『日本の名山北岳 博品社』

※

それは、明治新政府が戦略上の必要から、イギリスやフランスから学んだ新測量技術の三角点測量で日本地図を確定した際、その山を「白根岳」と明

記したことによります。当時は陸軍測量部にもの申す者は誰一人おらず、それがそのまま戦後も国土地理院に引き継がれて、学校教材にも「白根」と表記され、現在に至っていると言われています。

立ち上げる際に千人分の会費を拠出したと
いう人。

三 「古典に見る甲斐が嶺・ 甲斐の白峰」

(一) まずは「甲斐」の名について少し触れておきます。我が国で最も古いと言われる歴史書の古事記と日本書紀(併せて「記紀」という。)の中にある「酒折の宮物語」にこの名が記されています。その中で、倭建命(日本書紀は日本武尊)が、「新治筑波を過ぎて幾夜寝つる」と詠うと、火焼の老人(みひたきのおきな)が即座に「かがなべて夜には九夜日には十日を」と歌で答えた。命は、これを誉め東の国の長官に任命した。これが甲斐の國の在庁官人で文人の一号であると記紀は記しております、おそらく「甲斐」というという國名が文字として現れた最初ではないかとされております。

因みに「火焼の老人」の出自には諸説あり、甲斐の国人ではなく、命の軍旅に随行していた身分の低い倭(奈良県)の人とする説が有力です。なぜな

ら従軍していなければ九泊十日の日数が呪嗟に出ではこないというのであります。

(二) 時を経て平安時代、『古今和歌集』の歌人である甲斐守小野貞樹、甲斐守小目、小凡河内躬恒、右衛門府壬生忠岑などは甲斐に赴任した在庁

官人であったと言われています。

この古今和歌集の中に作者不明の「かひうた(甲斐歌)」が一首あり、一首は

「甲斐が嶺をさやにも見しが
けけれなくよこほりふせる

さやの中山」

「東海道を旅して佐夜の中山が見える所まで来たものの、予想に反し低く横たわっているだけであった。いつそのこと甲斐が嶺を早く見たいものだ」という意味とあります。

もう一首は

「甲斐が嶺をねこし山こし

吹く風を人にもがもや
ことづてやらん」

「甲斐が嶺の峯を越し、山を越し吹く風の心地よさを、できるこ

となら知人にも教えてやりたいとで
も言うのでしょうか「心地よさ」

ではなく「激しさ、冷たさ」だつ
たかも知れません。いずれにせよ

都では味わえない「甲斐が嶺の風」
だつたのです。

「甲斐が嶺ははや雪白し
神無月しぐれて暮れるる」というものです。

このように、都から赴任した在庁官人は、盆地の西に白く雪化粧した連山が浮き立つ見事な姿に感嘆して和歌を詠み、都に帰つて歌会で披露したため、都で評判となり、多くの歌人が見たこともない「甲斐が嶺」を想像して詠つたことから「なまよみの甲斐」と言い、甲斐の歌枕として競つて詠まれたと言われております。

なまよみの甲斐歌の中には「甲斐が嶺の山里みれば
あしたづの命をもたる
人ぞすみける」(紀貫之)ここでは「甲斐が嶺」は今までもなく甲斐国(西端に聳える南アルプス連山)であり「あしたづ」は鶴の異名で、南アルプスの山裾に都留郡があり、長寿の人が住んでいるというもので

す。

前述の佐夜の中山は静岡県掛川市坂で、ここで詠まれた古歌が石碑に刻まれており、その一つに

「甲斐が嶺ははや雪白し
神無月しぐれて暮れるる



「Mなび」のできるまで

南アルプス市役所職員

手塚 健

平成二二一年十月に、北岳山頂付近の各所にQRコードの記されたプレートが道標などに設置されました。芦安ファンクラブの方々に設置していただきましたので、ご存知の方もいらっしゃると思います。

このQRコードを携帯電話のカメラで読み取ることによって、モバイルサイト「Mなび」に接続することができます。周辺の情報や北岳の自然や歴史についての知識を知ることができ、また連携している「山歩きナビ」に登録すれば、GPSによる現在地確認、登山の履歴の記録など様々なサポートを受けることができます。

この「Mなび」のアイデアは、私たち南アルプス市役所職員の有志による提案によって生まれました。

平成二十年度、市役所職員の政策作成能力を高めることを目

秘書課)の事業として、政策づくり勉強会というものが発足しました。

政策づくり勉強会は、意欲のある職員を募り、毎週一回終業後に集まって、班ごとに話し合って、一定期間ごとに、その話し合いで取りまとめたことを、市長らに対して政策提言を行います。参加している職員は、あくまで有志による勉強会への参加ということで、残業手当などはありません。

示された、市民アンケートや投書、または市長のマニフェストなどに沿った課題を元に、職員たちでアイデアを出し合いました

が、活動に慣れてきた平成二二年度末の取り組みでは、自由な提案をすることになりました。

班編成は、提案ごとに組み替えているのですが、そのときの班員は、総務課、文化財

課、会計課、教育総務課、道路整備課という面々。バラバラな部署ですが、普段はなかなか一緒に作業することのないメンバーと共同作業をする、というのも勉強会の隠れた目的です。

テーマは自由ということで、各自でアイデアや資料を持ち寄ったのですが、その中に「まちめぐりナビプロジェクト」というものがありました。

これは、情報技術による移動支援を扱った国土交通省の支援による事業なのですが、その中に、まちの中にある史跡などにQRコードの看板を用意し、携帯電話で観光情報を得る、というものが、すでに尾道などで実施されていました。こ

れを南アルプス市でも応用できないか、と考えました。

文化財課の斎藤さんが見つけてきたアイデアでしたので、最初は市内の史跡などを巡るものを考えましたが、尾道のように歩いて回れる地域と違い、車社会となっている南アルプス市では、史跡を巡る



のに歩いて回るには歩道などもあまり整備されておらず、史跡などもそれぞれがちょっと離れているというのが実状で、

これは難しいのではないか、と没になりました。

それなら、山はどうか。登山は基本



的に歩いてするものですから、看板に立ち止まるのも問題ないですし、むしろ大きな看板などを設置しにくい山のほうが、携帯電話で情報を得る利点が大きいのではないか。

こう考えたのは、実は私が「北岳ゆめ俱楽部」という職員による登山同好会に



を冠した市の職員が市内の山のことを知らないのでは困るのではないか、ということで行われた北岳登山の研修に集まつたメンバーによって作られた同好会で、研修後も南アルプスの山を中心に県内各地の山を登山しています。このメンバーの中に芦安ファンクラブの方がいらしたこともあって、南アルプス芦安山

岳館の塩沢館長とその奥様など芦安ファンクラブの関係者の方々にも顧問として参加していただいています。

この「北岳ゆめ俱楽部」での登

山経験もあって、市の名前である南アルプスで、このまちめぐりナビができれば、それは便利だし、宣伝効果も高いのではないかと思つたのです。

しかし、問題点もありました。一つは、登山の際に携帯電話の通じる場所が少ないのでないか、

入つていたためです。「北岳ゆめ俱楽部」は、峡西六町村が合併して南アルプス市が誕生した年に、南アルプスという名前

いうのでは困るのではないか、ということでした。

ところが、みんなで調べてみたところ、北岳周辺で NTTdocomo が携帯電話を使えるようにする予定があること、携帯電話による登山サポートをすでに実施している地域があることがわかつたのです。



額の開発経費がかかるのではないか、と応用する分にはそれほどお金はかからないと ROUTE の安武氏から連絡をいただけました。

「これならいけるのではないか、という」とで、まちめぐりナビではなく登山ナビとして「Mナビ」をプレゼンすると決めたのです。

しかし、プレゼンをするにあたりもう一つ難関がありました。携帯電話によるナビの便利さを普段あまりこういった機器を使うことのない年齢層の方々にどうアピールするべきか。けれども、最近の登山者は、そういった中高年の方々ですので、これをクリアしなければ、実際の利用も少ないともいえます。そこで、文章や図で説明するよりも、これはもう実際に体験してもらうのが一番だらうと、プレゼンでは、くじゅう連山で使われているQRコードを用意して、お持ちの携帯電話で実際に試していただきました。これが功を奏したのか、二度のプレゼンで生き残り、高い評価をいただくことができました。

そして平成二二二年度になり、高評価になつた提案のうち、資金面や関係団体との連携が問題なさそうな2つの提案が選ばれ、実際に事業化されることにな

りました。その二つのうちの一つとして「Mナビ」が選ばれたのです。

事業化にあたっては、政策推進課が中心となり、市役所内の関係部署の職員と、提案した政策づくり勉強会のメンバーである斎藤さんと私、それから専門家として塩沢館長、さらに南アルプスを活動の拠点としている芦安ファンクラブから清水准一さんがプロジェクトチームのメンバーとして参加して取り組むことになりました。

こうして七月にPTが召集されたのですが、そのわずか三ヶ月後の十月には試行開始することができました。

試行開始に至るまでには、携帯電話の使えるエリアの拡充が情報を入手したときの予定どおりではないことがNTTdocomoとの話でわかり、それでも稜線など電波の届くエリアを選ぶことになつたり、また山歩きナビとの連携などもROUTEの安武氏との協議の中で登山客の安全面からいろいろ機能の制限を設けることになつたり、また何より目立つようにしたかったプレートも国立公園内ということで環境省からの指示です。地味な色合いになつたりといろいろとあ



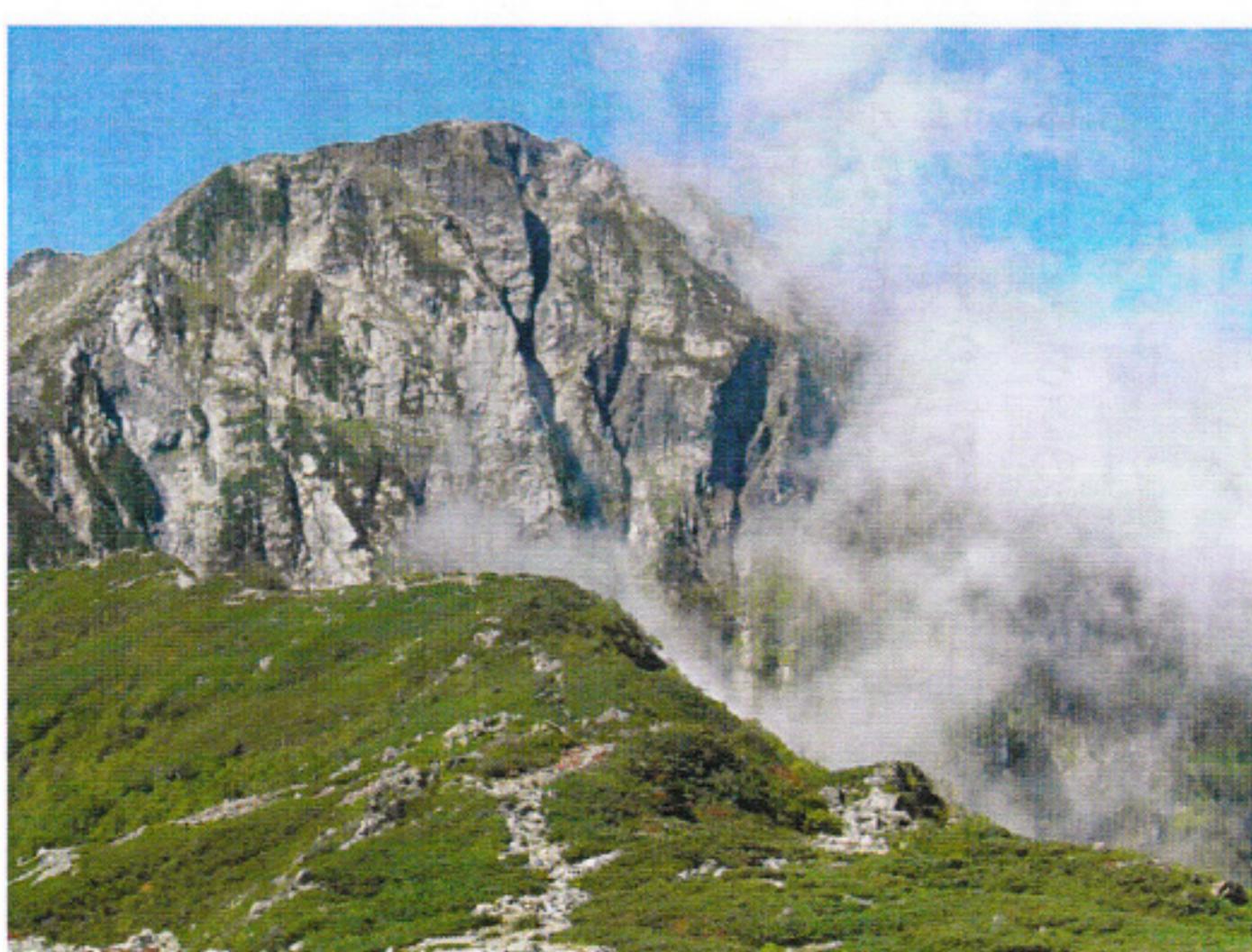
つたのですが、関係者の皆様のご協力により、行政の携わっている事業としては非常にハイスピードで事業が進展しました。もちろんシーズン中にはせめて試行にこぎつけたい、というのが当初からの目標ではありました。これほどスムーズに進んだのは、芦安ファンクラブや関係者の積極的なご協力があつたからだと思します。行政と、NPOなどの住民の方々が同じ方向を向いていれば、こういった意欲的な事業もあつという間にできる、これが協働の力なのかなと実感しました。

ちなみに、プレートのデザインは、文化財課の斎藤さんです。業者の方に頼んだとしても通用するデザインだと僕はデザイン案を固めるときに「Mナビ」は「Mナビ」になりました。

それから「Mナビ」の「M」は、単に南アルプスの「M」のつもりだったのですが、あとで「マウンテンのM」とかけてあるんじゃないの?といわれて、そういえばそうだなと思ったという経緯。「Mナビ」はいろいろと幸運に恵まれて実現に至つたのですが、こんなところも天の配剤というところでしょうか。

「Mナビ」のこれららの課題は、利用者の拡大と周知、そして周辺との連携です。幸い、県内では山梨日日新聞などに記事として何度か取り上げていただき、山と渓谷社の「山と渓谷」十二月号・一月号でも話題にしていただけたことがあります。

ともあれ、無事試行に至ることができ、提案者として一安心しているところで北岳に登る際には「Mナビ」をご利用ください。そしてこれからも共に「Mナビ」を盛り上げていきましょう!



山行日数三千日の

記念山行

六月十二日に志賀高原の奥にある焼額山（二千十メートル）に妻と登つた。高根の家を五時十五分に出発し、長坂インターから信州中野インターまで高速道路を利用、土曜日の割引で料金は千円と割安。蓮池まで順調に走つたが、蓮池から焼額山登山口への五・五キロメートルは渋滞していてノロノロ、不信に感じたが車の流れにしだがい登山者駐車場に七時四十五分に着いた。向こう側の大駐車場には沢山の車が停められていて、拡声器で説明されていたが、それによると今日は山ノ内町の山菜取りの解禁日にあたり、大勢の町民が焼額山の山菜を探りに山に登るようだつた。一足先に登り始たが途中で多くの人達に抜かれた。皆のお目当ては根曲り竹の筍やゲレンデの蕨のようだつた。町の人達はそれぞれ空のザックに厚布製の袋状の前掛けを付けて根曲り竹の藪に入つていつた。私達も一緒に採つていけど言われたが山を登りに来たので上をめざした。登山道は林にはいつたり、

スキーのゲレンデを登つたりであつたが途中からは二人だけになり、梢ではビンズイが轟り気持ち良い。スキーゴンドラの山頂駅のあたりから残雪が現れ、湿地には水芭蕉の花が咲いていた。ここに水芭蕉は背丈が低く花も小さくてとても可憐であった。針葉樹の中登る木道の周りには水芭蕉やシヨウジョウバカマの花がたくさん咲いていた。林を抜けぽつかりと明るいところに出るとそこが頂上で大きな稚児池があつた。池の水は透き通つて中にヤゴや蛙が沢山見えた。周囲にはヒメシャクナゲの蓄みがピンク色にふくらんでいた。焼額山は、周りの山から見ると多くのゴンドラやリフトが架設され、余り登ろうという気持ちが起きなかつたが、志賀高原の山で残つていたので登つてみたらとても良い山だつた。この山を山行記録の三千日の記念山行に選んだ訳ではなく、二十七歳から積み重ねた山行の日数がこの山で三千日になつただけなのだ。二人で記念の写真を撮り、池を一周して登つて来たルートを下山した。途中で根曲り竹の筍を十本ほど採り焼き筍で晩のつまみにした。

一昨年の暮れに胃癌の手術を受け、

山に行けない日々、二十七歳からノートに書いておいた山行記録をパソコンに移し、色々の項目に分類し、その内の山行日数欄の合計が三千日になつた訳です。十五歳で登山に芽生え、高校生の時に八王子の山岳会に入り、先輩方にお世話になって夢中で登つていた二十六歳まで

の記録を紛失してしまった訳ながら、途中の二十七歳かの記録です。踏んだピーグも

八百六十三山で、これから新しいピークを百三十七山加え是非千山を踏みたいと思つて

いる昨今です。

二千十年七月六日

井口功



「北沢峠に防鹿柵を設置しました」

山梨県森林総合研究所

飯島勇人

近年、ニホンジカが個体数を増加させ、樹木のみならず高山植物にも深刻な影響が出ています。南アルプス地域は世界的に見ても希



北沢峠周辺の様子。多数の稚樹が

少な動植物が存在しますが、この南アルプスにおいてもニホンジカが増加し、その影響が懸念されています。そのため、多数の高山植物が存在する

お花畠では防鹿柵の設置が進んでいます。その一方で、高山帯の下部に広がる天然林に対する対策はほとんど行われていません。しかし、樹木の成長には長い年月が必要であるため、特に森林の次世代を担う稚樹がニホンジカの摂食で消失してしまえば、南アルプスの天然林ははげ山になってしまふかも知れません。そこで当所では、北沢峠付近と双児山周辺のシラビソ・オオシラビソ・コメツガ・トウヒを主体とする針葉樹天然林に、防鹿柵を設置することとしました。

設置作業は、芦安ファンクラブに委託業務として実行していただきました。作業は2010年9月中に2回に分けて実施されました。山岳域での設置は様々な制約が伴い、特に双児山周辺は傾斜がきついことから作業は困難を極めましたが、ファンクラブの皆様が懸命に取り組んで下さった結果、防鹿柵を設置することができました。設置後に行つた植生調査では、立木にはほとんど被害が見られないものの、北沢峠周辺ではすでに多くの稚樹が二ホンジカの摂食によって枯死している実態が明らかになりました。防鹿柵を設置した場所としない場所では、数

十年後には稚樹の本数に大きな差が生じると思われます。今後は防鹿柵周辺の調査を継続し、南アルプスの天然林におけるニホンジカの影響評価と、早期の被害対策の重要性を訴えていきたいと思っています。



設置作業の様子

緊急情報 北岳バットレス上部崩壊！ 枯れ木のテラス下部が消失。四尾根、リガリー奥壁ルート

登攀の危機

山岳遭難防止
「大久保基金の会」



落石が大樺沢まで達し登山道を傷めています。当分の間、バットレスへの登攀と下部の通行はご遠慮ください。